

Title	Nampyoki 南漂記 [Naufrage dans le Sud] traduit, avec une introduction et des notes, par m [^] <me> muramatsu-Gaspardone (Bulletin de l'Ecole francaise d'Extreme-Orient, t. xxxiii, 1933, fasc. 1)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.2 (1935. 8) ,p.168(350)- 169(351)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350800-0168

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

キリスト教國民には特に重んぜられるニネヴェの破壊が紀元前六〇六年ではなく前六一二年であることは本誌にも度々報導した如く今や學界の定説であつて、歐米の他の諸著に、又本書にも當然受容せられてゐる(二三一頁)。しかし本邦の諸大家による近刊諸著には、僅かに杉勇氏(世界歴史大系第十四篇西洋古代史三五五頁)を除き、その他は何れも不問に附せられてゐるのである。

豊富な挿畫とその解説は、初版以來本書の最も特色とする所であつたが、新版に於ては、前記ツタンカーモン王の陵墓やウル市の出土品の寫眞は言ふまでもなく、著者の主宰する東方研究所の發掘にかゝる未發表のものも含み、新發見が興味ある説明と共に滿載せられ、それにストーンヘンジ(本誌第九卷一號八〇頁)を始めとし、多くの航空寫眞が利用せられる様になつたことも初版以來の大なる進歩である。

チグリス河畔のエシユヌナ (Eshnunna) に於て新たに發見された圓筒形印章が本誌にも度々(第十一卷二號一六四頁、第十三卷一號一五〇頁以下等) 報道せられたインダス河下流のモヘンジヨ・ダロ發見のスタンブ式印章(本誌第十三卷一號口繪)と比較せられ、メソポタミヤの藝術には象が顯はれず、犀は全く知られてゐなかつた點からして、この新發見の印章に示されてゐる象牙は、その手法と共に、東印度系統のものであることを主張してゐる(一四五頁)のは、近刊『ヨーロッパ文明』(一二六九—一二七二頁)に附載せられたこの文化輸入系統についての諸説(別項拙譯参照)に一つの進歩を示すものであらう。

その他サルゴン一世時代の下水道やセンナケリブがニネヴェ

市に築造した世界最古の上水道(一九三三年發見)、エジプトからバビロニヤ・アッシリヤへの通路に當るアルマゲドンの要塞市の發掘圖などは新版に採用せられた珍しい挿畫の若干を示すものに過ぎない。

曾つて本書初版の前身たるプレスネド古代文化史の邦譯刊行を試みた自分は、今度最近約二十年間に於ける古代史研究上の進歩を完全に取入れ、活字を大きくして改版し、新しい参考書目を加へたこの良著の刊行を讀者に報じ得ることを喜ぶものである。かゝる良著は歐米に於ても當分見られないであらうし、本邦に於ては斷じてあり得ないであらう。八二四頁。時價七圓。(間崎万里)

Select Documents of European History.

vol. I. 800-1492, by R. G. D. Latham,

vol. II. 1492-1715, by W. F. Rehdewey,

vol. III. 1715-1920, by H. Butterfield, 1931, London.

學習用として便利である。各卷五志、時價各四圓二十五錢。(間崎万里)

Nampyoki 南蠻記 [Naufrage dans le Sud]

traduit, avec une introduction et des

notes, par Mme Muramatsu-Gaspardone

(Bulletin de l'Ecole française d'Ext-

rême-Orient, t. xxxiii, 1933, fasc. 1)

徳川鎖國三百年の間、不慮の災難により海上漂蕩して他國に渡り、送還せられた船頭達によつて所謂漂流記物なる特種の文學を生み、智識に饑えてゐた邦人の間に不完全ながら外國の事情を傳へてゐた。明治以降石井研堂氏によつて其の蒐集出版が企てられ、またその北邊に關する記文は殊に學界に珍重せられて屢々研究翻譯の主題となつてゐたが、今度ガスパードン夫人により寛政六年安南南方に漂着した陸奥の船頭達の漂流談が佛文に翻譯せられ詳細な脚註、解説を附して刊行せられたことは、漂流記文學に日頃興味を持つ吾人にとつて此上なく悦ばしい事實である。もとより無學な船頭達の記憶から好事の者が筆録編纂したもので平俗凡庸事實に多少の誤りのある點は考へに入れねばならないがまた一面常民の生活の差違、人情の機微などに觸れ、却て公けの文籍に見られぬ面白味があり、彼我の文獻の殆ど缺けた十八世紀末の日本と安南關係史の一資料として相當重要な意義を持つてゐる。譯者の準據した版本「南飄記」は寛政十年京都版で當路者の忌諱を恐れて事實を小説化し人名や地名を相當ぼかしてゐるが、それでも翌年發賣禁止の悲運に會したものであり、譯者は本漂流記の實録とも云ふべき近藤守重の安南紀略藁に見えた公けの報告を序文中に翻譯し末尾には同じく同書に引かれた安南及び支那の當局者の附けた漢文送り狀を譯出し、懇切周到を極めてゐる。本書の表題を南飄記と改めたのは既に由來古く此譯者も亦其の先蹤を追はれてゐるが、然し此の版本「南飄記」が、其の緒言に飄を腰につけて海を越ゆる南飄道人と云ふ人物を拉し來り、其の口から安南漂流の談をなさしめると云ふ趣向は、かの印度支那の諸人種の間

大洪水の際飄又は南瓜が漂蕩し、その中から人類の祖先の生れた神話が流布してゐることを知つてゐる吾人にとつては極めて面白く感ずるモチフである。従つて徳川期の通俗文學の一資料として此安南漂流記のタイトルには南飄記より南飄記と云ふ題名を保存した方がフォークローアとして寧ろ興味がありはしなかつたであらうか。本文の翻譯は極めて綿密であり、其の註も種々創見に満ちてゐる。たとへば漂流民が謁見した安南國王の居城が今日のサイゴン附近嘉定であつたことなどは本篇が初めて吾々を啓發して呉れた所である。その外安南の動物として擧げられた野牛を當時の用語例に従ひ山羊であることを指摘して呉れたことなど譯者の努力に感謝しなければならぬ。たゞ漢字の日本の讀方や其の挿入法に少許の誤植がないでもないが此等は白壁の微瑕と云ふべきで再版の折の訂正を待ちたい。七七頁に蛇の皮を「ギタルの絃とす」と譯してあるのは「皮をさらして三味せんに張る」と云ふ原文(版本が手許になく石井氏本に依る)と比べてどうであらうか。細末の點で將來の増訂を期待する所はあるが然しなにはともあれ我國漂流文學を充分學問的に海外學壇に移殖の勞を取つて呉れた譯者の勞苦には感謝に堪へぬ所があり、何卒譯者の印度支那に對する興味を減却されない中に今後安南に關する他の二漂流記即ち安南國漂流物語、奥州人安南國漂流記の佛譯を續行してつとに佛國日本學者のなすべかりし事業の一であつた此面倒な仕事を完成して戴きたいものである。(松本信廣)